

2018年9月

聖句随想・折々の言（ことば）

「2018年〈夏〉の3冊から 想うこと」

牧師 森 言一郎

神のなされることは皆その時にかなって
美しい。神はまた人のところに永遠を思

（コヘレトの言葉 3章11節）

2018年の夏は酷暑だった。その夏の終わりに、
私は母校・日本聖書神学校の卒業生研修会に
久方ぶりに参加した。場所は福島。

8月27日（月）の朝は赤穂線で岡山に出て、東海
道新幹線で東京に向かい、常磐線でいわき市に降
り立った。西大寺発5時31分の列車に乗り込むた
めに4時50分起きという修行僧並みの早い朝だっ
た。久し振りの旅である。

車窓から遠くをボンヤリ眺めながら、時に何かを

読みたくなるかも知れない、と考えた私。荷物にならない程度に本をと思い、薄めの 3 冊をキャリーバッグに放り込んだ。

*

その一つが向田邦子さんの文庫本『思い出トランプ』という直木賞受賞作も含む短編集だった。

この本、昔読んだはずの一冊だったが、いつしか書棚から消えていた。先だって、山根基世（やまねもとよ）さんという元・NHK のエグゼクティブアナウンサーが、とある文芸誌の「向田邦子を読む」という特集号の中で、「私が一冊を選ぶならばこれを置いて他になし！」と確信をもって勧めているのを見て、直ちに書店で求めた。

*

ところがである。新幹線で読み始めた『思い出トランプ』、今の私にはどうにも波長

が合わない。一番読みたいものではなかったのだ。

平凡な私たちの〈日常〉に触れてくるはずの向田邦子ワールドに没頭できないまま、巻頭の「かわうそ」という佳作を読んでおしまいとなった。もちろん、向田作品がわるいのではない。人のこころというのは変わっていくことを妙に実感した。

*

次の一冊は『自由は汝の魂を歓呼して迎える』（新教出版社・2002年）という説教集だ。これは書斎の机の片隅に置いておくだけでも安心を感じる珍しい書で、目の届く所にぽんと重ねていることが多い。

作者の細川道弘先生は神学校で組織神学を担当された方。20世紀の偉大な神学者と呼ばれるカール・バルトの和解論を熱く論じる方だった。黒板に向かう細川先生は講義中にチョークを何本もへし折るような方だったのに、先生が召された後に、奥さまや親しい思いを抱く方々の手で編集された

この説教集の中には、私が知らない静かな細川道弘牧師がおられる。

*

宿 泊は〈かんぽの宿いわき〉の畳の部屋だった。二日目の夕食前、ゆっくりと休憩できる時間ができて『自由は汝の魂を歡呼して迎える』を開いた。いずれも、決して長くない説教なので読みやすい。その中から幾つかを選んで読むにつれ気付いたことがあった。

私が神学校を卒業したのは1993年3月だったが、その後、細川先生はパーキンソン病との闘いの日々が始まり、車椅子で過ごしながら66歳で召されていく。その病の現実を知ったのもこの説教集を通してだった。

*

そ んな先生が1997年4月4日に神学校の礼拝堂で「神の御業が現れるために」という

題で語られた説教が神学生のメモを元に収められている。

「もう、説教原稿が見えなくなりました。首も目も動きません。……視野が狭くなり、ほとんど真っ暗になりました。でも私は不幸ではありません」。

それが細川先生が神学校でなさった最後の説教であり、実に、この一節、その一語が、自分を支えてくれていたことを知ったのだ。私は折々にこの言葉を確認していることになる。

*

3冊目は、阪田寛夫という方が書かれた『バルトと蕎麦（そば）の花』という随想だ。阪田さんは、大正14年に大阪に生まれた方で、芥川賞作家としても知られる。

あの童謡「サッちゃん」を作詞して世に送り出した方である。さらに『讚美歌21』の「372 幾千万

の母たちの」の作詞者だ。南大阪教会で受洗されたクリスチャンだ。

*

じつは私。阪田寛夫さんに興味があったのではなく、『バルトと蕎麦の花』の中で主人公として登場する〈ユズル牧師〉こと、影山讓先生（2018年召天）が大好きで、影山先生のこと書かれていると聞いたのが、この本を求める切っ掛けだった。

影山讓先生が長年仕えられたのは、長野県の黒姫という村にある信濃村教会（当時は伝道所）。かつて私が兼務した妙高市の新井教会から車で一時間程の所である。

*

私は、影山讓先生の説教に伝道者として歩み始めてまだ間もない頃に偶然一度だけ触れる機会があった。説教の中身は完全に忘れてしま

った。

だが、魂のこもった言葉、その力と空気感ともいうべきものが、未だに私の体の奥底に残っているのだ。

この人・この説教はすごいという衝撃を受けた。そんな思いを抱かせる説教者との出会いは稀有である。

*

半 年前に手にした『バルトと蕎麦の花』。これが私にとって、とてつもなくおもしろく美しい書なのである。

さすが、芥川賞作家の阪田寛夫さんが描く世界は見事だなと思わずにはおれない。たとえば、信濃村教会を舞台にしてこんな場面がある。

「(ユズル) 牧師の話言葉にも、土地のものでない縄文風とでもいうか、何か根源的な訛りがあって、

これも聞き慣れると、もしかするとキリストの言動を述べ伝えるのに、一番ふさわしい言葉ではないかとさ思えてきた」と阪田寛夫さんは描くのである。

「書く」ではなく「描く」がふさわしいと確信する。他にも味わい深い描写がちりばめられている。

教会から遠のいていた阪田寛夫さんが片道一時間は掛かる道を、たとえ炎天下であろうとも、歩いて通うようになった〈ひみつ〉がユズル先生だった、というわけである。「元気の素」である〈住職〉のことを、縄文風と見抜いた芥川賞作家もすごい。

そして〈ユズル牧師〉と〈阪田寛夫〉の会話なき会話が、今の私を何とも幸せな心持ちにしてくれるのだ。

*

*

信 濃村教会といえは、旭東教会の毎月最初の木曜日の祈禱会で共に読み学んでいる『イエスさまの譬え話』（YMCA 出版）を書かれた清水恵三先生がこころを込めて伝道・牧会された教会である。何とも不思議な巡り合わせを思わずにはおれない。

神の摂理のうちに生かされていることを感じるこの頃の私である。実は、創世記 38 章から「タマル」について記す予定だったのだが、今の私にはそれができなかつた。おゆるし頂きたい。end